

修了生からの
お便り



知的給水、 そして 学び続ける教師へ

今から30年以上も前、まだ元号が「昭和」の最後の時代でした。新採用2校目の勤務、中学校現場での6年間の経験を経て、大学院の第4期生として芸術系美術コースで学んでいました。新構想大学として全国の先駆けとなるべく実践的なカリキュラム、充実した設備環境、著名な先生方の下で、何かワクワクとした昂揚感、期待感に包まれて、美術教育の研究や作品制作に励んでいたことを覚えています。

夏の集中講義で、宮田亮平先生から鍛金の指導を受ける機会がありました。ご承知のように、宮田先生は佐渡市のご出身で、イルカをモチーフにした「シュプリングエン (Shpringen)」シリーズで有名な日本の鍛金工芸家の第一人者です。東京藝術大学の学長を務められた後、平成28年4月から第22代文化庁長官に就任されています。当時、先生はまだ40歳前後、藝大の助手をされていた頃ではなかったでしょうか。大変な暑さの中、宮田先生の指導の下、

何時間も汗だくになって槌を振る、一枚の銅板から立体を打ち出して一輪挿しを完成させた時の喜びは入でした。学生や院生を相手に気さくに接し、エネルギーで澆刺とした壮年期の宮田先生のお姿とともに、鮮明に記憶に残っており、今となっては大変貴重な思い出です。

現職教員の大学院での研修や内地留学などの期間のことを、「知的給水時」と言います。教員にとって、多忙な職務の中で、自己研鑽のための時間的・精神的なゆとりをもつことは現実的に大変難しいものです。そんな中で、まさに言葉通り、大学院での研修は、その枯渇しそうな頭や心、体にも十分な養分や水分を補給する機会となります。

国家的な教育改革や機構改革の中で、国公立大学の在り方、そこで学ぶ学生や院生の学びなども改めて問われています。しかし、現職教員の再教育としての大学院での研修は、「学校現場」という着地点が保障されており、明確

早川 義裕

(はやかわ よしひろ)



上越市教育委員会教育次長、新潟県上越市出身。昭和63年3月、大学院修了後、糸魚川第二中学校、城北中学校教諭を経て、平成10年4月、中里中学校教頭。平成12

年4月から、新潟県教育庁義務教育課指導主事・副参事・係長を経て、平成17年4月、牧中学校校長。平成20年4月から、義務教育課管理主事・係長・参事・課長を経て、平成25年4月、城西中学校校長。平成27・28年度、新潟県中学校長会・中学校教育研究会・中学校体育連盟会長を務める。平成29年3月、退職後、同年7月から現職。

な課題や目的をもって学ぶことができるという制度に変わりありません。「教師になることより教師であり続けるほうが難しい」と言われる中、こうした機会を得られることは、教員にとって極めて有意義なことです。

ぜひ、多くの方々が積極的に大学院派遣制度を活用し、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質能力を生涯に渡って高めていく「学び続ける教師」を目指すことを期待しています。